

# 首里城および周辺遺跡出土のシカに関する考察

*Shika* deer bones Excavated from Shuri Castle and Tenkai Temple

菅原 広史

SUGAWARA Hiroshi

ABSTRACT : The Shuri Castle and neighboring sites such as the Tenkai Temple often yield the remains of *Shika* deer, which is not native to the Okinawa islands. Based on comparative studies with modern deer specimens, *Shika* deer bones recovered from the region belong to *Cervus nippon*. Furthermore, it is possible to further classify them into subspecies by measuring the size of the bones. The smaller are *C. nippon keramae*, *C. nippon yakushimae*, and *C. nippon mageshimae*; the larger ones are *C. nippon pulchellus*, *C. nippon nippon*, *C. nippon centralis* and *C. nippon yesoensis*.

The analysis of these bones shed light on the external relationship of the Ryukyu Kingdom. The analysis indicates that *C. nippon* was brought to the Okinawa Islands several times. One of the reasons that *Shika* deer were imported was for consumption as indicated by the presence of cut marks. *Ryukyu-koku-yurai-ki* (the genesis of the Ryukyu Kingdom), describes that in the early 17th century deer were carried from Satuma into Ryukyu. Additionally some documents record that venison was one of the menu items with which the king regaled Chinese envoys. Thus the existence of *C. nippon* remains from Shuri and Tenkai Temple evidences some form of relationship among Ryukyu, China, and Japan.

## 1. はじめに

本論は首里城および天界寺から出土したニホンジカの骨から、琉球王国におけるシカ利用の様相とその意義を考察するものである。沖縄に人間が住み始めて以降、沖縄本島にはニホンジカが生息していないものとされる。その中で2007年度に行われた首里城御内原北地区の発掘調査においてニホンジカと思われる骨が出土した。これまでも首里城の各地区や天界寺の発掘調査からニホンジカの出土が報告されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2001、金子2002・2003）。

シカ骨の出土は琉球王国時代にシカを島外から持ち込んだことを示すと言えるが、その具体的な目的や様相についてはこれまで考察されていない。現時点では四肢骨などが確実に出土しているのは首里城と天界寺のみである。ごく限られた地域に出土傾向を有することから、シカは極めて特別な意味を持つ存在ではなかっただろうかと推察される。一方でケラマジカに関する文献史的研究から、それが人為的な移入である点や移入の年代についてなどの研究がなされている（城間2002など）。琉球王国においてシカの存在がどのような意義を持ち、また利用されていたか考古学的な考察を行う。同時に文献史料を参照し、その内容を考古資料から裏付けるという形で、相補的に両者を結び付けることでより具体的なシカの利用相に迫ることが本論の目的である。

本論ではまず出土資料を動物考古学的な分析、種同定や計測データに関する検討を行う。その後、これまで論じられている文献史料の解釈を参照した上で考察を進めてゆきたい。

## 2. 対象資料：首里城および天界寺出土シカ骨資料の概要

今回扱う出土資料は首里城各地区（御内原北地区・右掖門地区・管理用道路地区）と天界寺の発掘調査で



得られた資料である。調査報告書をもとに出土事例を検索した後に、遺物を実見して観察などを行った。この内、首里城右掖門地区と天界寺から出土したシカについては報告書中で金子浩昌氏による報告がなされている（金子 2002・2003）。その中で右掖門地区出土のものはケラマジカに、天界寺出土のものはニホンジカと同定しており、「何らかの用途」あるいは「食用」にされたものと記載している。本稿ではこれらを参照しつつ、新たに追加された首里城御内原北地区の出土品と共に現生標本と比較観察を行った結果を筆者の観点から述べてゆく。

#### （a）首里城御内原北地区

2007 年度に発掘調査が行われた御内原北地区で円形石組遺構が 1 基検出された。内部からは多量の陶磁器・瓦・糞石・動物遺体・植物遺体が出土しており、城内や御内原におけるゴミ捨て場（シーリ）としての機能を有していたと考えられている。出土した陶磁器から遺構の帰属時期は 17 世紀前半と推定されている。なお、調査に関する概要は本誌前掲の報告（仲座 2009）に詳しいためご参照いただきたい。

本地区から出土している部位は肩甲骨（図－2）、上腕骨（図－3）、橈骨（図－4）、尺骨（図－5）、中手骨（図－6）で、中手骨以外は円形石組遺構の内部から出土した。それぞれについて以下に概述する。

- ・肩甲骨（右）：関節部分～肩甲棘の部分までを残すが、関節面の状態や大きさなどから成獣ではないと考えられる。
- ・上腕骨（左）：ほぼ完形で残存している。内外側面・後面に多数のカットマークが観察される。一本の骨に刻まれる数としては比較的多いと言える。傷は浅く刃物による引き切りの痕であろうと思われる。
- ・橈骨（左）：完形で残存している。カットマークなどは観察されない。
- ・尺骨（左）：橈骨と同一個体のものである。滑車切痕周辺を中心に遺存しており、遠位端は欠損している。
- ・中手骨（左）：骨幹～遠位端までが残存している。

以上の中で直接関節が組み合う橈骨と尺骨に加えて、質感やサイズから上腕骨も同一個体に属したものであるかと思われる。中手骨は近位端が欠失しており、遺構外からの出土であるため断定はできないが、やはり同一個体である可能性が推測される。上腕骨に残されたカットマークは左右側面に頻繁である他、前後面にも少数見られ、入念に刃物を当てられた様子が窺われる。カットマークは肉を骨から取り外す際に刃物が骨に当たることで残されたと考えられるものである。首里城内に肉の付いた状態で搬入され、利用した後に廃棄した行為が想定される。

#### （b）首里城右掖門及び周辺地区

右掖門地区の調査では、右掖門の基壇構造について成果が得られているが、同時に戦後の攪乱も激しく明確な層序の確認が困難であったようである（沖縄県立埋蔵文化財センター 2003）。出土遺物は「一括」でまとめられており、詳細な年代の特定は不能である。

右掖門地区からは環椎（図－7）・上腕骨（図－8）が出土している。

- ・環椎：腹側かつ尾側の半分ほどが残存している。後関節面にはカットマークが残されている。関節面に刃物が当てられているほか、前後に切断されているようである。
- ・上腕骨（右）：遠位端周辺が残存している。スパイラル・フラクチャーが前面側に観察されることから、前面の遠位端付近を打点として打ち割ったのではないかと考えられる。

環椎、上腕骨ともに明確な意図をもって骨に対する加撃を行っていることが窺える。

#### （c）管理用道路地区（図－1）

- ・肩甲骨（左）：関節面から 70 mm ほど残存している。しかし、関節面などが部分的に破損しており計測は不能である。肩甲棘の始まりの根元に 3 本のカットマークが観察される。



#### (d) 天界寺

天界寺は尚泰久（在位：1450～56）によって建立された寺で、円覚寺・天王寺とともに琉球三大寺と称される。順治年間（1644～61）には火災で焼失したとの記録が残る。その後、明治末頃廃寺になるまで約400年間の歴史を有する。以下に挙げるシカ骨の資料は「溝状遺構」から出土しているが、これが具体的にいつの時期に相当するかは判然としない（沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b、2002）。

天界寺からは大腿骨近位端（図－9）・大腿骨遠位端（図－10）・脛骨（図－11）が1点ずつ出土している。

- ・大腿骨（左）：近位端。大転子から近位側の骨幹までを残すが、大腿骨頭は欠損している。骨幹の割れ口にはスパイラル・フラクチャーが観察される。
- ・大腿骨（左）：遠位端。遠位側骨幹から遠位端までを残す。大腿骨滑車のやや上の箇所にカットマークが窺える。
- ・脛骨（左）：遠位端。遠位端からやや上の骨幹までが残る。カットマークは見られないものの、スパイラル・フラクチャーが観察される。

いずれも首里城各地区の出土品と比べると発達が進んだ骨であるように感じられる。上記三点は「溝状石列」から出土しており、遺構所属時期は陶磁器などの遺物から15～16世紀頃だろうと報告されている（沖縄県立埋蔵文化財センター 2002）が、寺の継続期間から考えると断定することは難しい。また、天界寺からはこの他に落角が出土しているが攪乱層からの出土であるため本分析からは外した。

表1 首里城及び天界寺出土のシカ骨一覧

出土遺跡	部位	左右	遺存状態	特記事項	備考
首里城御内原地区	肩甲骨	右	関節		17世紀前半
	上腕骨	左	完存	内外側面にカットマーク	
	橈骨	左	完存	尺骨と同一個体	
	尺骨	左	尺骨頭～骨幹	橈骨と同一個体	
	中手骨	左	骨幹～遠位端	スパイラル・フラクチャー	
首里城右掖門地区	腰椎	—	後位腹背面	中央で分割、内側にカットマーク	
	上腕骨	右	遠位端	スパイラル・フラクチャー	
首里城管理用道路地区	肩甲骨	左	関節周辺		
天界寺	大腿骨	左	近位端	スパイラル・フラクチャー	
	大腿骨	左	遠位端	スパイラル・フラクチャー	
	脛骨	左	遠位端	スパイラル・フラクチャー	

### 3. ニホンジカの亜種分類の意義と方法

ニホンジカとは亜熱帯から冷温帯に分布するシカ科の一種であり、日本列島には5～7の地域亜種に分類される群が生息する。即ちエゾジカ *Cervus nippon yezoensis*、ホンシュウジカ *Cervus nippon centralis*、キウシュウジカ *Cervus nippon nippon*、ツシマジカ *Cervus nippon purcellis*、マゲジカ *Cervus nippon mageshiae*、ヤクシカ *Cervus nippon yakushimae*、ケラマジカ *Cervus nippon keramae* である（阿部ほか 2005）。元来、多様な環境に適応するため頻繁に変異を起こすため亜種ごとの違いが比較的顕著である（高槻 2006）。そのため出土骨からも上記亜種分類が出来るのではないかと考えられる。ホンシュウジカを除けば比較的限定された地域ごとに生息する亜種を特定することで、沖縄へもたらされたニホンジカが、どこに起源を持つものであったかを推測することが出来る。シカの移入元を特定することで、琉球王国と移入元の地域との交流関係を窺うとともに、その一端をシカを媒介に論じることが可能であろう。また、近年 mtDNA を用いたニホンジカの遺伝的系統を調べる研究がなされており、北海道～兵庫の北日本とそれより西の地域の南日本のグループに系統が分かれるという（Tamate ほか 2000）。本分析では行っていないが、もし出土資料から DNA を抽出することが可能であれば、移入元特定にあたり有力な情報となるだろう。



分析はニホンジカ各亜種の現生標本を用いて出土資料と比較をすることで、いずれかの亜種に分類できるか検討した。まず第1に形態的な比較観察を行い、次に各部位を計測した値の差を利用して比較を行った。比較に用いた標本はニホンジカ（日光産）、エゾジカ、ツシマジカ、ヤクシカ、ケラマジカの5種類である。「ニホンジカ（日光産）」はホンシュウジカにあたるが、収蔵している栃木県立博物館の収蔵資料目録に従い、本論中では上記のように表現している。

なお現生標本は栃木県立博物館および琉球大学風樹館の資料を、許可を得て観察・計測を行い、その所見・データに基づく分析を行った。また、形態観察では他に国立歴史民俗博物館・東京大学総合博物館、沖縄県立博物館所蔵の資料観察による所見も含めている。

## 4. 分析結果：現生標本との比較観察

### (a) 形態の観察と比較

形態観察では、出土資料をそれぞれの現生標本と直接比較することで、いずれの亜種の形状に近似するかに着目した。特に御内原地区出土の上腕骨・橈骨・尺骨は完形に近いので詳細な検討を行うことができる。ただし、生物学的研究においてもニホンジカの亜種分類で比較対象に使われるのは、骨の場合には頭蓋骨である事が多い。頭蓋骨が最も差異が現れやすいためだろうと思われる。一方で四肢骨の形態による類別基準などが示された例は見当たらないため、今回の分析において試みとして行った。

結論から先に述べると形態の比較によって出土シカ骨はニホンジカ *Cervus nippon* に同定されるが亜種レベルに分類することは困難であったと言わざるを得ない。観察してみると全体的な形状はニホンジカいずれの亜種とも類似性が認められる一方、骨端部周辺の形状では微弱な差異を認めることが出来る。しかしながら、これらの異同を亜種間の差として同定の根拠にすることはできないと思われる。関節部分や筋粗面の発達などは生体時の活動において形成が左右され、変異が起こりやすい箇所である。そのため同一亜種の現生標本同士の比較でもいくらかの差を見て取ることが出来る場合がある。逆に異なる亜種同士であっても極めて近似する形状を呈する例が観察されることから、ある程度の形態差は個体差として考慮する必要がある。出土資料と標本の間に見出される差異は、確実に個体差の範囲を出るものとは言い難いため、形態観察における亜種同定は困難であると結論付けられるのである。

### (b) 計測値の比較

形態観察においては出土資料と現生標本の各亜種間に明確な有意差を見出すことが困難であったが、サイズの点では一定の傾向があるように感じられた。そこで骨長計測による数値データからの比較を試みた。ニホンジカは比較的容易に生態的変異を起こすとされる点は前述したが、明確な差となって表れる要素の一つが体のサイズである。生体時のサイズをみると分布域によって大きな差が観察される。分布域が北へゆくほど大きくなることが知られ（ベルクマンの法則）、最北のエゾジカとヤクシカでは最大で3倍以上の体重差にもなる。また、雌雄でもその差が大きく1.5倍以上の体重比となる（阿部ほか 2005）。もちろん亜種の分類要素は他にも存在するが、サイズからある程度の分類は可能であると考えられる。骨のサイズはそのまま生体サイズに直結すると言えることから、出土資料の計測値を現生標本のそれと比較することで、亜種同定が可能なのではないかと考え分析を進めた。

計測位置はDriesch(1976)を参照した。基本的に四肢骨の全長(GL)・近位端最大幅(Bp)・骨幹最小幅(SD)・遠位端最大幅(Bd)から計測可能な個所を全て計測した。橈骨の近位端のみ幅と厚さを計測している。ただし出土資料が完形ではない場合は残存箇所に応じて基準の位置を設けて計測を行った。天界寺出土の大腿骨では近位端筋粗面直下、遠位端筋粗面直上の骨幹幅を計測箇所として設定した。また、出土資料を見ると骨端が癒合済みであるため、骨端が未癒合の現生標本は極力計測対象から外すこととした。



計測値を比較してみると(表2)、出土地区ごとの傾向を読み取ることができる。まず、御内原地区出土資料は計測した部位いずれの箇所でもヤクシカの計測値と近い値を示している。特にヤクシカ雄(表2:M313)およびヤクシカ雌(表2:M308)の標本に近いと言える(表3)。例えばヤクシカ雌の上腕骨の場合GLでは差が $-0.7 \sim -1.5$  cm・平均 $-1.0$  cm、それ以外の場所では $-0.6 \sim -4.9$  mm・平均 $-1.8$  mmの範囲となる。ヤクシカ雄ではM313の標本がGL $-3.0 \sim -4.0$  cm、GL以外が $-1.8 \sim -4.0$  cm・平均 $0.3$  mmまでと比較的差が近く、その他のヤクシカ雄とはGL $1.4 \sim 3.3$  cm・平均 $2.2$  cm、GL以外が $0.9 \sim 14.3$  mm・平均 $4.9$  mmと差の範囲に広がりがある。上腕骨以外の部位・計測位置についてもヤクシカ雄では平均 $1.8$  mm、ヤクシカ雌では平均 $-2.0$  mmとなる(橈骨のGLを除く)。ツシマジカとの比較では雄の上腕骨のGL計測値差が $1.6 \sim 5.4$  cm・平均 $3.6$  cm、GL以外は $0.3 \sim 14.9$  mm・平均 $5.9$  mm、上腕骨以外では $-0.1 \sim 8.4$  で平均 $3.8$  mmである。雌では上腕骨・橈骨のGL差がそれぞれ $4.0$  cmと $3.2$  cm、その他の値差が $2.0 \sim 9.6$  mmで平均が $5.3$  mmとなる。出土資料との差が小さい計測値を示すものがある一方で、ヤクシカに比べると平均の値差が広がっている。

次に右掖門出土資料では環椎はツシマジカ・ヤクシカ雄、上腕骨は日光産ニホンジカ雌・ツシマジカ・ヤクシカ雄との計測値差が比較的小さいと言える(表4)。御内原地区のものと比べると、地域の幅が広くどの亜種に該当するか判断が難しい。ヤクシカ雌とエゾジカとは異なる大きさである点は確認できよう。

天界寺出土の資料は更に異なる傾向を示す(表5)。計測値の差が最も小さくなる標本は日光産ニホンジカ雌のものであり、 $-1.9 \sim 3.3$  mm・平均 $-0.7$  mmの範囲で差を生ずる。日光産ニホンジカ雌では $-2.1 \sim -9.6$  mm・平均 $-4.9$  mm、 $-9.4 \sim 1.0$  mm・平均 $-5.1$  mmとなり雄に比べると計測値はより小さい方向へ離れる。一方、これと逆の傾向を示すのがエゾジカである。エゾジカ雌は $-2.5 \sim 5.3$  mm・平均 $1.2$  mmと出土遺物に近い計測値を示し、エゾジカ雄では $-2.0 \sim 7.9$  mm・平均 $3.4$  mmとなりより大きな方向へ差の範囲が広がることが読み取れる。ツシマジカとの計測値差は、一部で小さい数値が計測されたものの、雄は平均 $-5.1$  mm、雌の平均 $-5.2$  mmである。ヤクシカに至っては雄の平均計測値差 $7.6$  mm、雌は平均値差 $-10.8$  mmと大きな差が表れる結果となった。

### (c) 小考

上記の結果を受け、形態・計測値を現生標本比較の方法とする分析では、首里城・天界寺出土のシカがニホンジカいずれの亜種に分類できるか完全に特定することは難しいが、ある程度対象を絞ることが出来たと考えている。御内原地区出土の各部位は、ほぼ小型亜種に属すると考えてよいと思われる。本分析ではヤクシカであり、ケラマジカ・マゲシカを含む島嶼型にあてはまるものであろう。これに対し天界寺出土資料は比較的大型で、ホンシュウジカなど北日本(北海道～兵庫)グループに属する可能性が高い。右掖門出土の資料は形態・計測値ともに決め手に欠け、いずれとも言い難い。

首里城・天界寺からシカが出土する点において、これらは沖縄本島外から持ち込んだものと考えられる。従来、後述する文献記録の観点などからは薩摩あるいは慶良間諸島を経由して搬入したとされるが、ここでもう一つの道筋が見えてくる。即ち本州の以北から渡った可能性である。分析の限りでは、天界寺出土のシカはホンシュウジカと同等かそれ以上の大きさをもった個体である。故に御内原地区で出土したものとは異なる移入元から運ばれてきた可能性を指摘できる。本州以北が搬入元であり、琉球王国と日本との関係を考慮すれば江戸を候補地として挙げることも出来る。現状では決定的とは言えないものの、首里城内へのシカの持ち込みがただ一度の活動ではなく、複数回あるいは複数個所を通じて行われていたと考えることはできるだろう。

ただし、分析に際してキュウシュウジカ、マゲシカは実際の現生標本を観察することができなかった。またその他の亜種についても十分な数の計測値が得られたとも言い難い。今後さらに観察・計測データを加え



表2 出土資料とニホンジカ亜種別計測値の一覧

分類	環椎		上腕骨				橈骨				尺骨		中手骨		大腿骨				脛骨					
	左右	全幅	孔径	GL	Bp	SD	Bd	BT	GL	Bp	Dp	SD	Bd	SDO	DPA	SD	Bd	近幹	遠幹	Bd	滑車幅	SD	Bd	Dd
エゾジカ(雄)M227	左	103.3	35.6	22.8	64.0	24.2	50.8	44.3	23.8	47.8	24.1	28.9	42.5	41.1	45.2	23.0	36.7	29.5	27.5	67.1	36.3	27.1	43.5	33.2
	右			22.9	62.5	24.3	50.9	44.2	24.2	47.4	25.0	29.1	42.9	40.5	44.5	23.0	35.9	29.2	27.5	63.5	26.4	26.9	43.5	33.5
エゾジカ(雌)M217	左	81.9	31.0	22.4	57.5	19.9	47.8	40.3	23.3	44.1	21.7	24.5	38.0	37.1	41.9	18.4	32.7	24.8	23.7	61.8	33.7	23.7	41.5	32.6
	右			22.5	57.1	20.2	47.4	39.9	23.3	43.7	22.2	23.6	37.7	37.5	42.6	18.3	32.4	24.2	23.5	61.0	32.4	23.8	41.1	32.7
ニホンジカ(雄)M092	左	96.5	30.6	21.5	56.7	20.1	44.6	38.3	22.1	40.3	24.0	24.5	36.3	34.7	42.0	18.8	31.1	22.6	24.4	55.0	31.7	22.1	36.7	29.6
	右			21.5	57.1	20.4	44.3	38.1	22.1	39.9	23.6	24.6	36.0	34.5	38.6	18.9	31.1							
ニホンジカ(雌)M098	左	70.2	6.0	18.1	44.6	14.5	37.2	31.6	18.8	34.3	19.8	18.8	30.2	27.4	31.0	14.6	25.8	17.1	18.6	47.5	25.7	18.5	32.3	27.4
	右			18.6	44.5	14.7	37.0	32.0	19.7	34.1	19.6	18.6	30.2	27.6	31.1	14.4	25.9							
ニホンジカ(雌)M130	左	71.4	26.8	18.7	44.9	16.7	36.8	31.1	19.6	34.6	18.7	20.0	31.0	27.0	32.0	15.7	26.3	19.2	19.9	47.8	25.8	20.6	32.6	25.9
	右			16.5	41.6	15.1	32.9	29.5	15.3	31.2	17.4	16.2	28.8			14.1	23.1	17.8	16.7	44.2	21.8	16.9	29.3	22.3
ツシマジカ(雄)M318	左	73.7	22.0	16.7	41.6	15.3	32.6	29.3	15.3	30.9	17.3	16.5	28.9	25.4	27.9	14.0	23.2	17.9	17.0	42.5	21.9	17.0	29.2	21.4
	右			20.3	50.5	20.0	42.5	34.4	19.5	36.7	20.4	22.9	34.1	31.3	34.1	17.1	27.5	20.4	22.4	50.2	29.5	20.9	38.2	29.5
ツシマジカ(雄)M381	左	85.5	26.1	20.3	50.4	20.1	41.7	34.3		36.5	19.7	22.7	34.0	31.8	34.4	17.3	27.6	20.5	22.1	50.2	29.0	21.3	32.4	27.9
	右			18.9	45.2	17.3	40.7	32.9	18.6	35.3	19.1	19.3	32.1	28.0	33.7	15.6	26.9	18.5	19.0	48.4	25.8	20.1	31.8	24.2
ツシマジカ(雌)M391	左	—	—						18.6	35.8	19.0	19.5	32.0	27.6	33.9	15.4	27.1	18.5	18.8	49.2	27.4	19.8	31.5	25.1
	右			18.9	44.2	17.2	40.3	33.2	18.6	35.8	19.0	19.5	32.0			15.4	27.1							
ヤクシカ(雄)M313	左	59.2	22.1	14.5	38.6	14.4	30.5	26.7	14.8	29.4	15.8	15.4	26.3	22.5	26.2	13.7	20.9	16.4	16.3	41.2	20.5	16.2	26.8	20.0
	右			14.6	38.2	14.3	31.7	26.9	14.7	29.4	16.0	15.5	26.4	22.1	26.2	13.8	21.2	16.4	15.5	39.7	20.7			
ヤクシカ(雄)M315	左	80.4	23.3		43.4				15.8	31.0	16.8	17.4	29.5	26.6	29.0			18.5	17.8	42.6	21.5	17.8	28.6	21.1
	右			16.5	42.9	16.8	34.5	28.4	15.7	31.5	16.9	17.5	29.2	26.8	29.4			18.3	18.1	42.7	21.7	17.7	28.8	21.5
ヤクシカ(雄)M316	左			18.2	49.6	18.2	37.7	31.3	17.0	34.9	17.5	19.1	31.1	27.3	30.9	16.5	25.2	18.5	19.2	47.0	22.5	19.5	31.4	23.3
	右			18.2	49.9	18.2	37.9	31.0	17.1	35.0	18.0	19.5	31.4	27.7	30.8	16.3	25.0	19.1	19.2	46.5	22.4	19.9	31.3	23.7
ヤクシカ(雄)M319	左			16.4	43.1	16.3	35.2	28.7	15.0	31.7	16.9	17.9	27.8	25.4	29.3	14.8	22.8	18.5	18.6	44.0	20.6	17.1	27.8	20.8
	右	77.6	22.8	16.3	42.9	16.3	34.6	28.4	15.1	31.4	17.4	18.0	27.7	25.2	29.5	14.9	22.9	17.3	18.6	42.9	20.9	17.3	27.9	21.3
ヤクシカ(雌)M308	左			14.1	37.9	13.3	29.2	25.5	14.0	28.3	15.6	14.7	24.8	21.9	24.1	12.9	20.8	16.8	15.1	37.7	19.3	15.7	25.9	19.4
	右	59.2	19.8	14.2	37.6	13.3	29.4	25.6	—	27.8	15.3	14.6	—	21.8	24.2	13.0	20.8	16.5	15.1	36.3	19.2	15.9	26.1	19.4
ヤクシカ(雌)M309	左			13.4	32.8	12.5	27.7	24.3	13.4	25.8	14.2	13.8	23.7	19.4	22.4	12.0	19.3	14.0	13.0	34.6	17.9	14.4	23.8	18.4
	右	53.2	18.9						13.4	26.2	14.7	13.9	23.8	19.3	22.3	11.9	19.6	13.9	13.1	34.5	17.1	14.4	24.0	18.5
ケラマジカ(雄)	左				48.0	18.1	42.7	33.7		35.7	20.9	21.8	32.4	32.1	38.1	17.4	29.2					20.7	32.4	25.5
	右															17.0	29.2							
御内原地区出土	左			14.9	35.6	13.9	32.3	27.5	15.4	29.1	16.2	15.9	26.1	23.4	27.2	13.4	21.8							
	右																							
右掖門地区出土	左			—	—	—	39.5	36.6																
	右																							
管理用道路地区出土	左																							
	右																							
天界寺出土	左																							
	右																	26.7	24.9	28.4	23.3	38.6	29.5	

GL:全長 Bp:近位端最大幅 Dp:近位端最小幅 Bd:遠位端最大幅 BT:上腕骨滑車幅 Dd:遠位端厚

※単位はGLのみmm  
 ※ニホンジカ・ツシマジカ・ヤクシカは栃木県立博物館蔵  
 ( )内の数字は収蔵No.(栃木県立博物館1989参照)  
 ※ケラマジカは琉球大学風樹館蔵

表3 御内原地区出土資料と標本の計測値の差 (GLのみcm、それ以外はmm)

現生標本の亜種	左右	上腕骨					橈骨					尺骨		中手骨	
		GL	Bp	SD	Bd	BT	GL	Bp	Dp	SD	Bd	SDO	DPA	SD	Bd
エゾジカ (雄) M227	左	7.9	28.4	10.3	18.5	16.8	8.4	18.7	7.9	13.0	16.4	17.7	18.0	9.6	14.9
	右	8.0	26.9	10.4	18.6	16.7	8.8	18.3	8.8	13.2	16.8	17.1	17.3	9.6	14.1
エゾジカ (雌) M217	左	7.5	21.9	6.0	15.5	12.8	7.9	15.0	5.5	8.6	11.9	13.7	14.7	5.0	10.9
	右	7.6	21.5	6.3	15.1	12.4	7.9	14.6	6.0	7.7	11.6	14.1	15.4	4.9	10.6
ニホンジカ (雄) M092	左	6.6	21.1	6.2	12.3	10.8	6.7	11.2	7.8	8.6	10.2	11.3	14.8	5.4	9.3
	右	6.6	21.5	6.5	12.0	10.6	6.7	10.8	7.4	8.7	9.9	11.1	11.4	5.5	9.3
ニホンジカ (雌) M098	左	3.2	9.0	0.6	4.9	4.1	3.4	5.2	3.6	2.9	4.1	4.0	3.8	1.2	4.0
	右		8.5	0.8	4.7	4.5		5.0	3.4	2.7	4.1	4.2	3.9	1.0	4.1
ニホンジカ (雌) M130	左	3.7	8.9	2.3	4.5	4.0	4.3	5.5	2.6	3.7	5.1	3.7	4.4	1.8	4.2
	右	3.8	9.3	2.8	4.5	3.6	4.2	5.5	2.5	4.1	4.9	3.6	4.8	2.3	4.5
ツシマジカ (雄) M318	左	1.6	6.0	1.2	0.6	2.0	-0.1	2.1	1.2	0.3	2.7			0.7	1.3
	右	1.8	6.0	1.4	0.3	1.8	-0.1	1.8	1.1	0.6	2.8	2.0	0.7	0.6	1.4
ツシマジカ (雄) M381	左	5.4	14.9	6.1	10.2	6.9	4.1	7.6	4.2	7.0	8.0	7.9	6.9	3.7	5.7
	右	5.4	14.8	6.2	9.4	6.8		7.4	3.5	6.8	7.9	8.4	7.2	3.9	5.8
ツシマジカ (雌) M391	左	4.0	9.6	3.4	8.4	5.4	3.2	6.2	2.9	3.4	6.0	4.6	6.5	2.2	5.1
	右	4.0	8.6	3.3	8.0	5.7	3.2	6.7	2.8	3.6	5.9	4.2	6.7	2.0	5.3
ヤクシカ (雄) M313	左	-4.0	3.0	0.5	-1.8	-0.8	-0.6	0.3	-0.4	-0.5	0.2	-0.9	-1.0	0.3	-0.9
	右	-3.0	2.6	0.4	-0.6	-0.6	-0.7	0.3	0.4	-0.4	0.3	-1.3	-1.0	0.4	-0.6
ヤクシカ (雄) M315	左		7.8				0.4	1.9	0.6	1.5	3.4	3.2	1.8		
	右	1.6	7.3	2.9	2.2	0.9	0.3	2.4	0.7	1.6	3.1	3.4	2.2		
ヤクシカ (雄) M316	左	3.3	14.0	4.3	5.4	3.8	1.6	5.8	1.3	3.2	5.0	3.9	3.7	3.1	3.4
	右	3.3	14.3	4.3	5.6	3.5	1.7	5.9	1.8	3.6	5.3	4.3	3.6	2.9	3.2
ヤクシカ (雄) M319	左	1.5	7.5	2.4	2.9	1.2	-0.4	2.6	0.7	2.0	1.7	2.0	2.1	1.4	1.0
	右	1.4	7.3	2.4	2.3	0.9	-0.3	2.3	1.2	2.1	1.6	1.8	2.3	1.5	1.1
ヤクシカ (雌) M308	左	-0.8	2.3	-0.6	-3.1	-2.0	-1.4	-0.8	-0.6	-1.2	-1.3	-1.5	-3.1	-0.5	-1.0
	右	-0.7	2.0	-0.6	-2.9	-1.9		-1.3	-0.9	-1.3		-1.6	-3.0	-0.4	-1.0
ヤクシカ (雌) M309	左	-1.5	-2.8	-1.4	-4.6	-3.2	-2.0	-3.3	-2.0	-2.1	-2.4	-4.0	-4.8	-1.4	-2.5
	右			-1.6	-4.1	-2.9	-2.0	-2.9	-1.5	-2.0	-2.3	-4.1	-4.9	-1.5	-2.2
ケラマジカ (雄)	左							6.6	4.7	5.9	6.3	8.7	10.9	4.0	7.4
	右		12.4	4.2	10.4	6.2								3.6	7.4

※略号は表2と同様

表4 右掖門地区出土資料と標本の計測値の差 (mm)

現生標本の亜種	左右	環椎 全幅	上腕骨	
			Bd	BT
エゾジカ (雄) M227	左	27.3	11.3	7.7
	右		11.4	7.6
エゾジカ (雌) M217	左	5.9	8.3	3.7
	右		7.9	3.3
ニホンジカ (雄) M092	左	20.5	5.1	1.7
	右		4.8	1.5
ニホンジカ (雌) M098	左	-5.8	-2.3	-5.0
	右		-2.5	-4.6
ニホンジカ (雌) M130	左	-4.6	-2.7	-5.1
	右		-2.7	-5.5
ツシマジカ (雄) M318	左	-2.7	-6.6	7.1
	右		-6.9	-7.3
ツシマジカ (雄) M381	左	9.5	3.0	-2.2
	右		2.2	-2.3
ツシマジカ (雌) M391	左	—	1.2	-3.7
	右		0.8	-3.4
ヤクシカ (雄) M313	左	-16.8	-9.0	-9.9
	右		-7.8	-9.7
ヤクシカ (雄) M315	左	4.4	—	—
	右		-5.0	-8.2
ヤクシカ (雄) M316	左	—	-1.8	-5.3
	右		-1.6	-5.6
ヤクシカ (雄) M319	左	1.6	-4.3	-7.9
	右		-4.9	-8.2
ヤクシカ (雌) M308	左	-16.8	-10.3	-11.1
	右		-10.1	-11.0
ヤクシカ (雌) M309	左	-22.8	-11.8	-12.3
	右		-11.3	-12.0
ケラマジカ (雄)	左	—		
	右		3.2	-2.9

※略号は表2と同様



表5 天界寺出土資料と標本の計測値の差 (mm)

現生標本の亜種	左右	大腿骨			脛骨		
		近幹	遠幹	滑車幅	SD	Bd	Dd
エゾジカ (雄) M227	左	2.8	2.6	7.9	3.8	4.9	3.7
	右	2.5	2.6	-2.0	3.6	4.9	4.0
エゾジカ (雌) M217	左	-1.9	-1.2	5.3	0.4	2.9	3.1
	右	-2.5	-1.4	4.0	0.5	2.5	3.2
ニホンジカ (雄) M092	左	—	—	—	—	—	—
	右	-4.1	-0.5	3.3	-1.2	-1.9	0.1
ニホンジカ (雌) M098	左	—	—	—	—	—	—
	右	-9.6	-6.3	-2.7	-4.8	-6.3	-2.1
ニホンジカ (雌) M130	左	—	—	—	—	—	—
	右	-7.5	-5.0	-2.6	-2.7	-6.0	-3.6
ツシマジカ (雄) M318	左	-8.9	-8.2	-6.6	-6.4	-9.3	-7.2
	右	-8.8	-7.9	-6.5	-6.3	-9.4	-8.1
ツシマジカ (雄) M381	左	-6.3	-2.5	1.1	-2.4	-0.4	0.0
	右	-6.2	-2.8	0.6	-2.0	-6.2	-1.6
ツシマジカ (雌) M391	左	-8.2	-5.9	-2.6	-3.2	-6.8	-5.3
	右	-8.2	-6.1	-1.0	-3.5	-7.1	-4.4
ヤクシカ (雄) M313	左	-10.3	-8.6	-7.9	-7.1	-11.8	-9.5
	右	-10.3	-9.4	-7.7	—	—	—
ヤクシカ (雄) M315	左	-8.2	-7.1	-6.9	-5.5	-10.0	-8.4
	右	-8.4	-6.8	-6.7	-5.6	-9.8	-8.0
ヤクシカ (雄) M316	左	-8.2	-5.7	-5.9	-3.8	-7.2	-6.2
	右	-7.6	-5.7	-6.0	-3.4	-7.3	-5.8
ヤクシカ (雄) M319	左	-8.2	-6.3	-7.8	-6.2	-10.8	-8.7
	右	-9.4	-6.3	-7.5	-6.0	-10.7	-8.2
ヤクシカ (雌) M308	左	-9.9	-9.8	-9.1	-7.6	-12.7	-10.1
	右	-10.2	-9.8	-9.2	-7.4	-12.5	-10.1
ヤクシカ (雌) M309	左	-12.7	-11.9	-10.5	-8.9	-14.8	-11.1
	右	-12.8	-11.8	-11.3	-8.9	-14.6	-11.0
ケラマジカ (雄)	左				-2.6	-6.2	-4.0
	右						

※略号は表2と同様

検討する必要がある。

## 5. 文献史料に見る琉球列島のシカ

### (a) シカの移入に関する記録

有史以来、沖縄諸島にはシカは自生していなかったと思われるが、現在では慶良間諸島にケラマジカが生息し天然記念物に指定されている。ケラマジカの由来は人の手による持ち込みと考えられており、これに関して琉球王国時代の文献にしばしば記載が登場する。中でも注目されるものが『琉球国由来記』に見られる記述である。

(巻四生類門)

「鹿 是崇禎年間、尚氏金武王子朝貞、從薩摩帶來、慶良間島ノ内、久場島放飼也」

(外間・波照間 1997 pp.133)

明の崇禎年間(1628～1644)に金武朝貞が薩摩よりシカを持ち帰り慶良間諸島に放したとするものである。また、これに対応するように薩摩側の文書にもシカを送付したとの記録が確認されている(城間 2002)。寛永9年(1632年)に生きたままのシカを薩摩から琉球へ送ったとする記録である。崇禎年間は薩摩による琉球侵攻の後にあたり琉球と薩摩の関係が強くなる時期である。そのため物品も様々に行き来したであろうことは想像に難くない。その中の一つにシカが挙げられ、一部が慶良間諸島に持ち込まれたと考えても良いだろう。そして持ち込まれたシカが後にケラマジカとして定着していったと考えられる。ただし、「琉球国由来記」内の記述が直接指す一群がケラマジカの直接の祖先であるとは必ずしも言い切れない。また、持ち込んだシカも薩摩側が九州で捕獲したものか、屋久島や馬毛島から運び出したものなのかも記録上定か



ではない。

また金武朝貞という人物に関して薩摩や江戸に上国していた記録が残されており、崇禎年間だけでもその数は4度に渡る(城間 2002)。金武朝貞がシカの移送に関わったことを補強するものと考えられる。

ただし一連の記録は物理的なシカの移動を示すものであるが、その目的等については触れられていないため異なる資料から論じる必要がある。

#### (b) 御冠船料理に関する記録

首里城におけるシカの利用目的については、金城須美子が複数の文献記録を用いて考察を行っている(金城 1993)。それによると、シカは御冠船料理に用いる素材として必要であったものと指摘している。御冠船料理とは琉球王国が中国からの冊封使をもてなす大宴で饗された宴席料理を指す。金城は文献からその献立構成や素材・調理法などをまとめ、これが中国宴席料理に準じたものであり、調理についても中国側の料理人が携わったとした。ただし食材は琉球側が用意し、その入手先について琉球内はもとより中国や日本など外からも持ち込んだとされる。シカについては『琉球冊封使一件』(1808 年)の中に鹿肉料理が存在したと報告し、中国料理における「燉鹿肉」と同様のものではないかと考察している。

解体痕を有する出土骨を食用と捉えるものの、具体的な調理法等を考古資料から特定することは困難である。記録として確実に残されているのは 1808 年のものであるが、首里城御内原地区の出土資料は 17 世紀前半に属するとされるため、記録以前から既にシカを宴席料理の素材として用いていた可能性を指摘できよう。

## 6. 考察：首里城・天界寺におけるシカ出土の意義

これまで述べてきた出土資料に対する分析及び参照史料などをもとに、首里城・天界寺から出土したシカがどのような意味を持つものか、まとめてゆく。

出土したシカ骨にカットマークやスパイラル・フラクチャーなど人為的な傷跡が残されていることから、これらが食用にされた残滓であることは容易に想像できる。また、このシカが「ニホンジカ」であり、沖縄本島の外から持ち込まれたと考えられる点も同様である。しかしどのような理由・経緯でシカの持ち込みがなされたかという点に対して、これ以上の言及が考古学的検討のみからでは困難であった。そこでニホンジカをさらに亜種分類する試みと文献史料を参照することで新たな見解を求めた。

まず、シカの移入元に関して考察を行う。現生標本との比較によると、主に骨長計測値に基づくサイズの検討から首里城御内原北地区のシカは、ヤクシカなどニホンジカの中でも「島嶼化」した小型亜種に属する可能性が高い。ただし、比較に用いた標本中ではヤクシカに最も近似したと言えるが、同じ島嶼化亜種であるマゲシカにも比定できる可能性は考えておかなければならない。御内原北地区出土シカ骨の帰属時期は 17 世紀前半と推定されることから、『琉球国由来記』に記された、「崇禎年間」の「薩摩帶來」とされる内容と合致すると言える。薩摩藩が屋久島・馬毛島などで捕獲したシカを持ち込んだものと考えれば、妥当性がある。また、キュウシュウジカやホンシュウジカが「久場島」に放されたのち、ケラマジカとして小型化したものが持ち込まれたとも考えられる。ただし、出土資料・文献記載の年代が両者とも正しいとすると、生態的変異による「ケラマジカ化」までの期間があったとは考えにくい。故に、「久場島」に持ち込まれたニホンジカが小型亜種のものであったか、あるいは小型亜種のニホンジカを直接首里城へ運び込んだものと考えられる。

一方、天界寺のシカは御内原地区出土のものと同線を画す。計測値によるサイズ比較では、ケラマジカ、ヤクシカなどの「島嶼化」した標本と同一群に属するとは考えにくい結果を示している。計測した標本のニホンジカ雄、エゾジカ雌が出土資料の値に近似した。この結果のみではホンシュウジカあるいはエゾジカに



同定できるとまでは言えないが、ヤクシカなど小型亜種とは異なる分類群である可能性は高いと思われる。御内原出土のシカとは異なる来歴を持つ存在であると言えるだろう。薩摩側が屋久島・馬毛島などの島と、それとは別の九州以北で捕獲したシカを送ったのではないかと推測される。あるいは、送り手そのものが薩摩と異なる存在であったとも想像される。当時の琉球王国の対外関係を考える限り薩摩以外では江戸が可能性に挙げられる。しかしながら、亜種の特定が十分ではない上、その他の史料でも江戸との関係の中でシカが登場する例はこれまでのところ確認できていない。本論の段階では、シカの移入に際して薩摩による単一の行為ではなく、「複数回」もしくは「複数個所の移入元」が可能性として想定されるとする考えに留めている。

第2の論点はシカの移入目的に関する点である。出土資料の観察からは首里城内へ持ち込まれた後に解体、食用とされた過程が推測される。この点は御内原北地区・右掖門地区・天界寺出土のいずれも人為的な傷痕を伴うことから同様の過程を経たものだろうと考えられる。しかし、首里城や天界寺の出土動物遺体の中でもシカはごくわずかに含まれるのみである。両者以外の沖縄諸島の遺跡においても食料残渣として推測されるシカ骨の出土は確認されていない。出土事例が極めて稀な点と琉球列島外からの持ち込みを必要とする点から、シカの存在は日常とは異なる特別な意味を持っていたと考えられるのである。首里城や天界寺といった琉球王国のごく中枢に位置づけられる場所に限定されて出土している状況も、これを裏付ける要素の一つと言える。この様な非日常的な意味を持つ要因の一つに冊封使への対応が挙げられる。前節の金城による考察の通り、冊封使に対する饗応のための御冠船料理素材としてならば、稀少なシカを取り込む理由として十分だろう。御冠船料理の献立の中にシカの記述が確認できるのは1808年以降の記録のようであるが、御内原北地区のシカは17世紀前半に廃棄されたものと推測されるため、当時既にシカを用いた御冠船料理が存在していた可能性を指摘できる。

また、シカ骨の出土が冊封使歓待に関係するものであるならば、天界寺から出土している点にも注目される。すなわち天界寺でもまた、御冠船料理の饗される状況が起り得たことを示すのである。分析の結果をみると、首里城出土のシカとは分類傾向が異なるため同一の解釈を適用できるか分からないが、天界寺が何らかの形で冊封使に対する関係性を持っていたと考えられる。

いずれにせよ、冊封使への対応は沖縄本島に生息しないシカを首里城や天界寺に持ち込むほどの労力をかける価値のある行為であったのだろう。さらに、シカの移入元に薩摩が関わることで、薩摩の琉球と中国に対する意識も垣間見よう。すなわち琉球を通して中国との関係を強めるとする思惑である。これらは文献史料の解釈から考察されている点であるが、実際にシカ骨が出土し、それが屋久島もしくは馬毛島に由来を持つシカであった可能性を示したことで、より具体的な裏付けが出来たと言える。

## 7. おわりに

以上述べてきた様に、出土数の極めて少ないシカ骨であるが、それが持つ意義は大きく、検討すべき価値のある資料である。ただし、今回行ったニホンジカの分類に対する分析は必ずしも確定的なものではない。マゲシカやキュウシュウジカの標本を参照できなかった点はもとより、ケラマジカやヤクシカ、ニホンジカに至っても十分な数の標本を比較・検討したとは言い難い。島嶼的な特徴を持つ小型亜種とそれと異なる属性を持つ亜種に絞った状態である。しかし首里城・天界寺から出土したこれらが示唆する内容は、琉球と薩摩の関係性、あるいは江戸との関係をも窺うことのできる可能性を秘めている。また、ニホンジカは日本のみならず中国など東アジアにも生息分布域を持つ。そのため御冠船料理素材の一部が中国からも輸入された事例（金城1993）に基づけば、シカもまた中国あるいは朝鮮など大陸からもたらされた可能性も否定は出来ない。今後さらに大陸産ニホンジカなどとも比較検討を行う必要がある。その他、遺伝子的な形質からニホンジカの系統を辿る情報なども抽出することができれば、ニホンジカの移入元をより具体的に捉える事が



可能であるかもしれない。文献史料を含め、新たなる資料の追加にも期待しつつ、検討を重ねてゆきたい。

(すがわら ひろし：調査班 嘱託員)

### <謝辞>

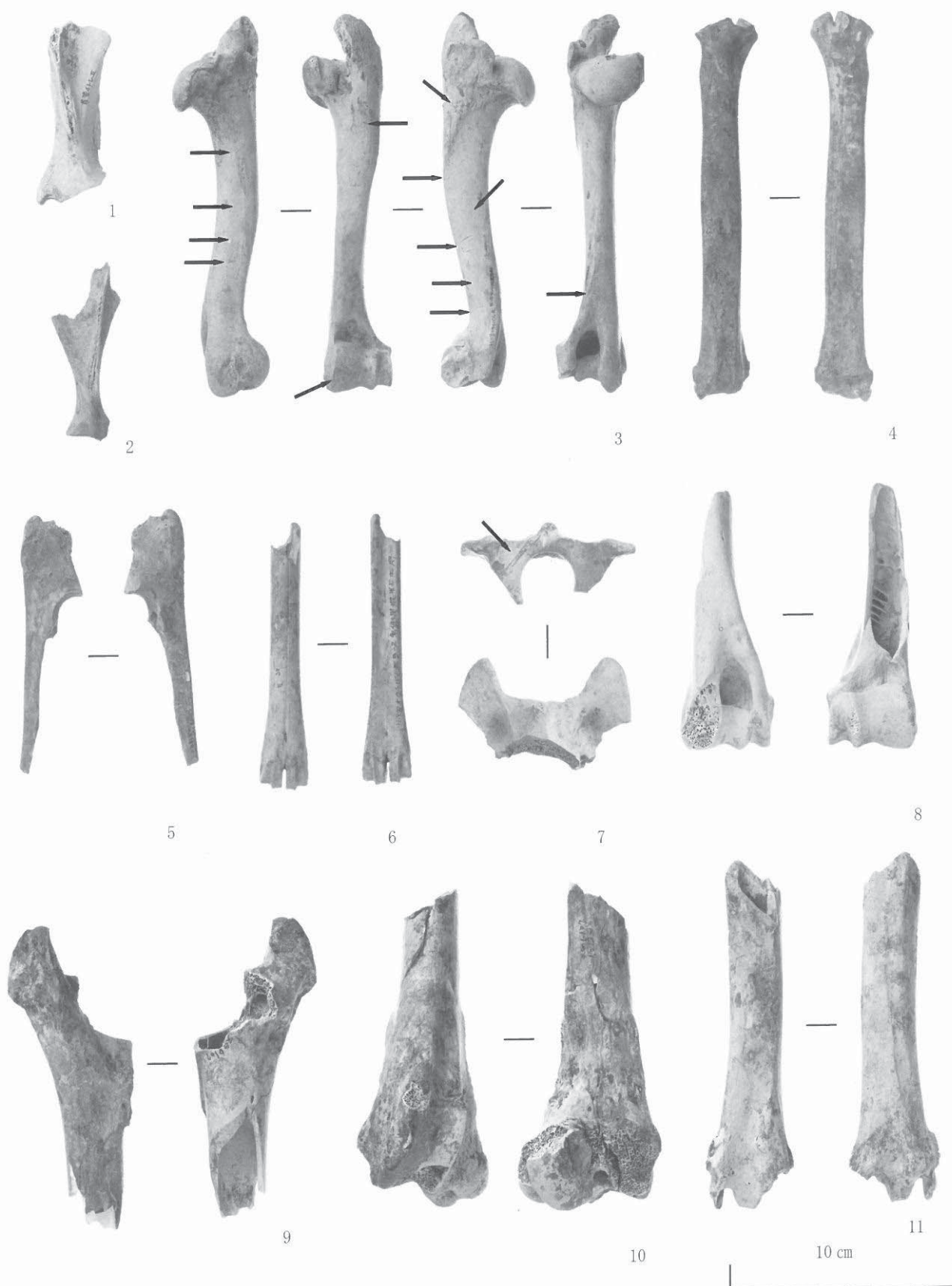
本論を執筆するにあたり現生標本の利用・閲覧に際して林光武氏（栃木県立博物館）、尾崎麦野氏（東京大学総合博物館）、知念幸子氏（沖縄県立博物館）、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）、琉球大学風樹館の方々にお世話になりました。また、未報告資料の使用を快く御許可下さいました仲座久宜氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）、ご助言賜りました樋泉岳二氏（早稲田大学）、その他ご協力いただいた皆様に末筆ながら記して感謝の意を表します。

### <引用・参考文献>

- 阿部永ほか 2005『日本の哺乳類 [改訂版]』東海大学出版会
- 大泰司紀之 1986「ニホンジカにおける分類・分布・地理的変異の概要」『哺乳類科学』第53号
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a『首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b『天界寺跡（Ⅰ）—首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『天界寺跡（Ⅱ）—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『首里城跡—右掖門及び周辺地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『首里城跡—御内原地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『首里城跡—御内原西地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第44集
- 金子浩昌 2002「動物遺体」『天界寺跡（Ⅱ）—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集
- 金子浩昌 2003「動物遺体」『首里城跡—右掖門及び周辺地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 金城須美子 1993「御冠船料理にみる中国食文化の影響」『第4回琉中歴史関係国際学術会議 琉中歴史関係論文集』琉球中国関係国際学術会議
- 金城須美子 1997「琉球王国時代の食生活の変遷と文化史的背景」『食生活文化に関する研究助成研究紀要』第9巻 財団法人アサヒビール生活文化研究振興財団
- 城間恒宏 1999「戦前の史料にみるケラマジカの記述」『資料編集室紀要』第24号 財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部資料編集室編
- 城間恒宏 2002「ケラマジカの由来に関する若干の考察」『資料編集室紀要』第27号 財団法人沖縄県文化振興会公文書館管理部資料編集室編
- 高槻成紀 2006『シカの生態誌』東京大学出版会



- Tamate Hidetoshi, B., Mamuro Rika, Izawa Masako, Shiroma Tanehiro, Doi Teruo 2000. Genetic Differentiation among Subspecies of the Sika Deer (*Cervus nippon*), with Special Reference to the Phylogeny *C.n.keramae* in the Kerama Island Group
- 知念幸子 1997 『沖縄県知念村上クルク原産の脊椎動物化石群について』 琉球大学修士論文
- 栃木県立博物館 1989 『哺乳類 (I) 日光・足尾産ニホンジカ (1)』 栃木県立博物館自然史部門収蔵資料目録 (3)
- 栃木県立博物館 2002 『哺乳綱』 栃木県立博物館自然史部門収蔵資料目録 (7)
- 外間守善・波照間永吉 1997 『定本琉球国由来記』 角川書店
- 仲座久宜 2009 「シーリ遺構から見る御内原のくらしー平成 19 年度首里城跡御内原北地区発掘調査からー」 『紀要沖縄埋文研究』 6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- Angela Von Den Driesch 1976. 'A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites' Peabody Museum Bulletin 1 Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University



図版1 首里城・天界寺出土のシカ

1. 管理用道路地区 出土〔1. 肩甲骨 (左)、2～6. 御内原地区出土〔2. 肩甲骨 (右)、3. 上腕骨 (左)、4. 橈骨 (左)、5. 尺骨 (左)、6. 中手骨 (左)〕、7～8. 右掖門地区出土〔7. 環椎、8. 上腕骨 (右)〕、9～11. 天界寺出土〔9. 大腿骨近位端 (左)、10. 大腿骨遠位端 (左)、11. 脛骨遠位端 (左)〕 ※矢印はカットマークの位置を示す



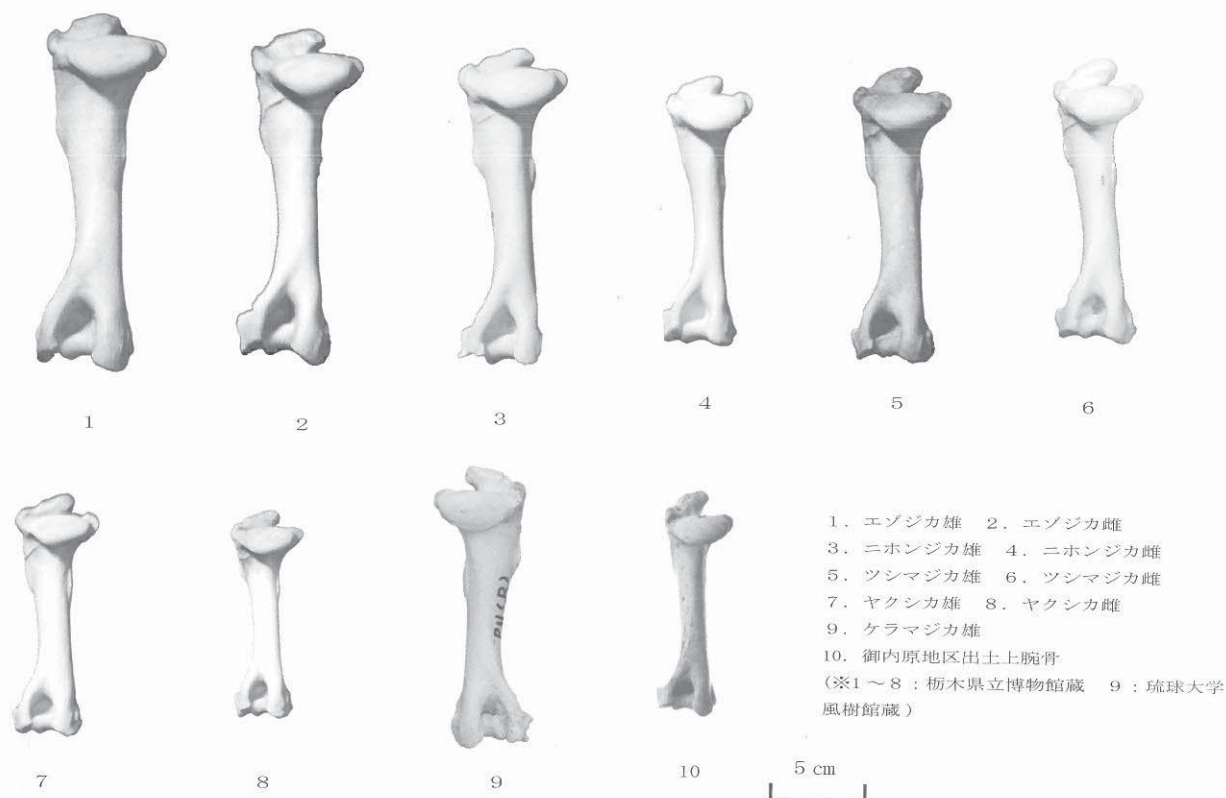


図2 出土品と現生標本資料の比較例〔上腕骨〕

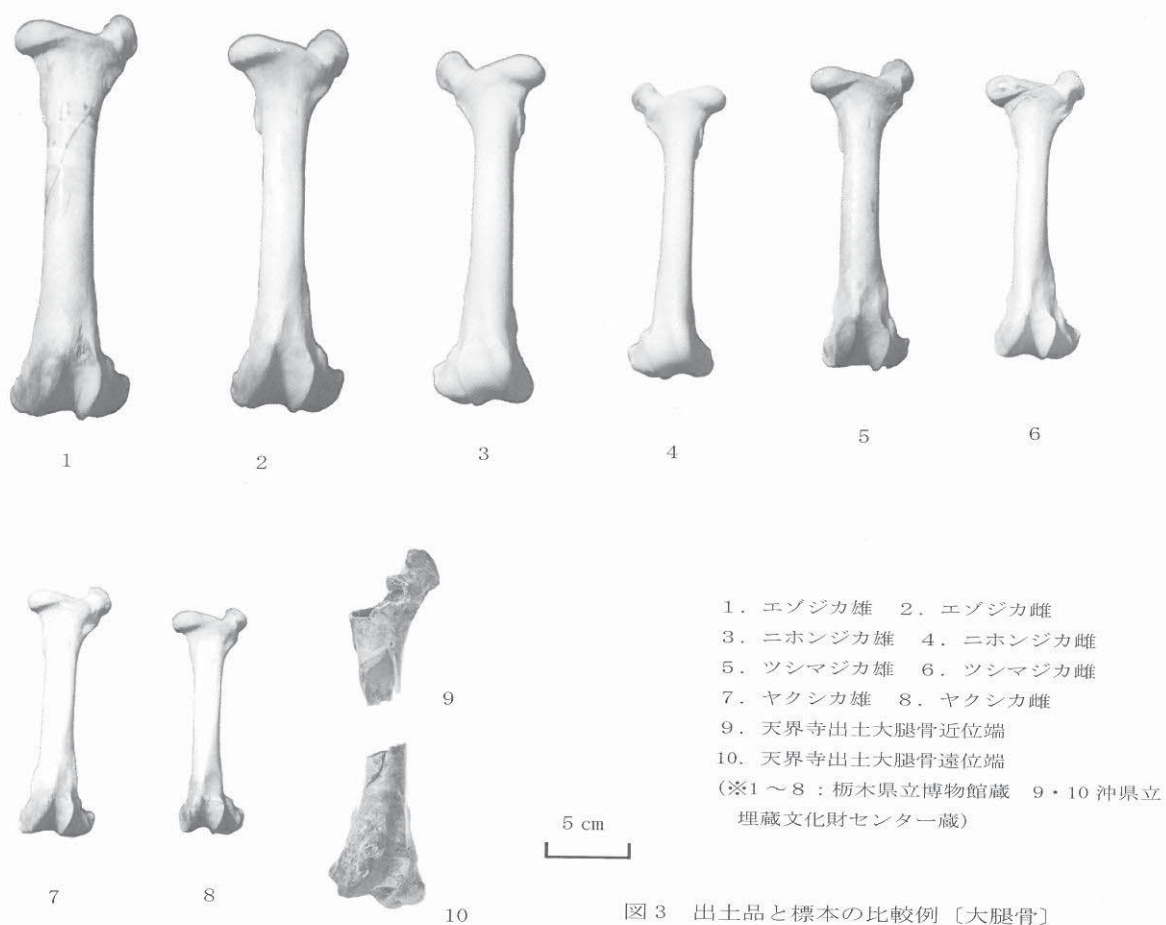


図3 出土品と標本の比較例〔大腿骨〕